

研修報告書No.15

所 属：東京大学医学部附属病院 研修医
研修先：大月町国民健康保険大月病院
宿毛市立沖の島へき地診療所

高知市から車で4時間、最寄り駅の宿毛まで車で30分ほど離れた、高知の最西端にある大月町の大月病院で1カ月間地域研修でお世話になりました。大月町は約5千人が暮らし、綺麗な海で有名な柏島やだるま夕日が見える自然豊かな町です。主に研修させて頂いた大月病院は25床あり3名の常勤医師が働いておられました。

地域での医療は普段研修している大学病院と大きく違っていて、その分、学ぶことや感じることの多い貴重な経験となりました。大月病院から徒歩2分ほどの住居を貸して頂き、主に午前は外来や入院患者と一緒に診させて頂き、午後は特別養護老人ホームでの診察や往診などに一緒に行かせて頂く日程でした。その他にも約100人の島民のいる沖の島での離島医療も研修させていただきました。

町で唯一の病院である大月病院でも医療資源は限られています。例えば、夜間には技師さんはいないので、採血もCT検査も医師本人が機械を使って検査しなければいけないそうです。研修している1ヶ月の間にも心肺停止や急性大動脈解離、高血糖高浸透圧症候群の方などマンパワーある大学病院の救急でも緊張が走るような重症な患者さん方も来院されていました。限られた医療資源の中でも懸命に地域医療を支える環境だからこそ、働く医師の責任感は強く、勉強熱心だったことが印象的でした。重症の患者さんが入院しているときは頻回の採血が必要であったときは私も夜中や早朝に採血を取りに行ったりと治療に密に関わることができました。ほぼ全快に回復されたときはやはりやりがいを感じることができ、とても貴重な経験をすることができました。

また、看護師さんやその他の病院のスタッフの方々からも学ぶことが多かったです。看護師さんや医療スタッフの方々には地元で長く暮らす方が多く、患者さんが顔見知りであったり、誰かの親戚というのもし少なくないそうで、カルテをみるより看護師さんの方が患者さんの社会歴や生活環境を知っていることもありました。「〇〇おばあちゃん、〇〇くん（お孫さんの名前）も元気？」という会話も自然にあり、都会にいて忘れがちな、地域ならではの対人の温かみある医療に触れられたように思います。看護師さんたちが仕事の合間にお母さんのように気さくに話しかけてくださったり、先生方が地元の美味しいものをご相伴に与ったり、私自身も大変よくして頂き、慣れない土地一人で来たにも関わらず快適に1ヶ月過ごせました。

そして、地域での研修では医療の社会的側面を学ぶこともできました。大月町も沖の島も高齢化と過疎化が問題となっており、人口が年々減少していているようで、特に沖の

島の人口減少は著しく、診療所では常勤の医師の配属を中止し、週に2回ほど医師が派遣されるようになったそうです。医師が派遣される日以外のときに患者の診療が必要な場合は宿毛市や大月町の医師がテレビ通話で容態を伺い、必要があると判断すれば本島に来てもらうようにしているそうです。今年から診療報酬が付き新しく進みつつある遠隔診療が必要性から生まれている状況を知ることができました。

また、「はたまるネット」という大月町を含む高知県の西南を幡多地区での医療機関の電子カルテを共有するという取り組みが研修させて頂いた時期から導入され始めていました。これによって患者情報が素早く正確に複数の医療機関で共有できるだけでなく、重複する検査や処方などの無駄を防いだり、今後は専門医へのコンサルテーションがスムーズになっていくそうで、医療の効率化を進める様々な可能性を含んでいると感じました。

高齢社会を含め、医療の社会的な問題は単に大月町や沖の島の問題でなく、高知県や日本全体の問題です。医療資源は有限であり、今後も質の高い日本の医療を守っていくために真剣に取り組んでいかなければならないことですが、地域では問題が顕在化している分、多くの先生方が危機意識を持って率先して熱心に取り組まれていることを知ることができました。私自身も地域研修で学んだ経験を今後生かし、精進していくことを強く思いました。